
飛龍天翔

舎弟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛龍天翔

【Nコード】

N5415D

【作者名】

舎弟

【あらすじ】

主人公の龍岡^{たつおかしょう}奨はある己の呪われた力と家庭の事情があいまって、子供の頃から高校2年の今に至るまで己の求めるものを見つけるために家族と別れ、喧嘩を続けていた。唯一信頼しており、今は東京に住んでいる姉の洋子の「東京にこないか？」という突然の手紙により、自分の住んでいる北海道ではいなかった自分の求めるもの、「対等に闘える相手」が見つかるかと期待して東京に行く。姉の計らいにより、姉の母校「青林高校」に転入する奨。奨はそこで様々な強敵や仲間と出会い、成長するのであった…。

第一話：「龍の目覚め・1」（前書き）

初めまして。作者の舎弟です。この小説は一応学園ものとなっておりますが、アクションものでもあります。（まあ、最初は完全に学園ものですが。（笑））拙い文章ですが、最後までお付き合い願えたらうれしい限りです。それではどうぞ。

第一話：「龍の目覚め・1」

俺は寝台電車のベッドの振動に揺られながら、東京を目指していた

…。

俺は龍岡奨。たつおかしょう

自分で言うのも何だがしょうもない名前だと思う。

正直、名前に

「龍」が付いている時点でもう変わっている。

まあ、自分の名前を卑下していても仕方がない、俺はとりあえずバツクから柿ピーを取り出し、それを口に放りながら窓を見た。

もうすぐ東京だ。

かなりの長旅だった。何しろ北海道からだからな。

姉貴は元気にしているだろうか…？

今は一人暮らしをしているらしい。

まあ、あんな親と一緒に暮らすぐらいなら、その方がいいだろう。

駅に着くのももうすぐだ。支度をしよう。

俺は支度を済ませ、駅につくのをベッドに横になって姉貴からの手紙を見た。

家族、か…。

俺は望まれて生まれたわけではなかった。

生まれた時からそれがわかった。何故なのかわからない。

しかし、俺は生まれた時から耳や目が使え、両親が何を考えているのかを

「感じる」ことが出来た。

両親は俺など生みたくなかった。姉貴一人で十分だったのだろう。しかし、彼等は人に尊敬され、慕われる

「いい人」で居たかったのだ。

俺を生んだのも中絶すれば世間体が悪くなる、だから生んだ。それだけだ。

だから小学校に入学する頃にはもう両親を信用していなかった。生んだ時から

「愛」がない親をどう信用しろと？

そして俺は荒んだ。

小学校から喧嘩ばかりして、ガキ大将をぶちのめしてガキどものリーダーになって、我が物顔で君臨した。

小、中学とそんなことを繰り返した。

気に食わないやつがいたらぶちのめし、地元の不良のチームも暴走族の頭も叩きのめして地元では最強になっていた。

その時俺は強さだけを信じていたからだ。

でも、そんな糞ガキを最後まで見捨てないでいてくれた人がいた。

姉貴の洋子だ。

姉貴は幼い時から俺をいつも見守ってくれ、時には力強く叱つてくれた。

彼女はいつも説教の終わりに言った。

「あたしはあんたがどんなバカしても、あんたを信じるよ。でも、自分が間違っていると思うことだけはしちやダメだよ。」

両親のことがあるせいか、最初は姉貴も信じてはいなかった。しかし、彼女は俺がどんな騒ぎを起こしても、面倒を見てくれた。

俺が殴った奴の家に行って頭を下げたり、知りもしない事件の犯人に俺が疑われた時も庇ってくれた。

喧嘩してボロボロになって帰ってきた時も、黙って服を洗濯してくれた。

姉貴は常に俺を見放さず、愛情をもって接してくれた。

だから、こんな俺が腐らずに生きることが出来るようになった。姉貴には感謝してもしきれない。

だが、

「あの事件」がキツカケで、俺は施設に送られ、両親は東京へと去っていった。

俺は見捨てられたのだ。

後で聞いた話だが、姉貴は俺を見捨てて東京に行くことを拒否してくれたらしい。

しかし、臆病な両親は俺を恐ろしく思い、去っていった。

俺は別に平気だった。

姉貴と別れるのはつらいが、あんな両親より施設の方がマシだ。

こうして、俺は家族と別れ、3年の月日が流れた…。

「東京…、東京…」

どうやら着いたらしい、俺はくそ重いバックを二つ引きずりながら、姉の龍岡洋子の住むマンションたつおかようこへ向かった。

「ここか…。つたく、なんでこんなに駅から離れてるんだよ、かつたるいっただらありやしないぜ。ええつと、番号は…つと。225号室か。」

バックを持ち上げ、階段を上り、姉の部屋のチャイムを鳴らした。ピンポン。

ドタバタする音と、

「はい。」という姉の声が聞こえた。

「どちらさま？」

「俺だ、俺。早く開けてくれ。」

「俺？俺じゃわからないよ、ちゃんと名前を言ってくれなきゃ。」

このアマ…。絶対わかって言ってるだろ？仕方なく名前を言う。

「奨だよ、龍岡奨。（たつおかしょう）あんたの弟。」

わざとらしく気付いたふりをし、声を高くして姉が扉を開ける。

「あら、奨じゃない！ほんとに久し振りだね。」

ああ、ほんとに久し振りだ。姉と会うのはもう3年ぶりだ。

「あんた、随分背が伸びたね」。3年前もデカかったけど、またさらに…。」

背丈はほっとけ…。

俺は姉の出した麦茶を飲みながら呟く。

麦茶を飲み終えて、一息ついた姉貴と俺は本題に移ることにした。

「あんたの行く高校、もう決まってるから。安心していいよ。姉ちゃんの母校。」

「へえ、準備がいいな、さすが。」

姉貴は鼻を高々と上げた。

「まあね。あ、名前は青林^{せいりん}高校。空気の美味しい高校よ。」

空気が美味しい？どういうことだ？

「言ったとおりの意味よ、山の上にあるの。自然いっぱい、だから空気が美味しいわけよ。」

「山…だと？」

「そうよ。」

「何処にあんだよ、そんな高校。」

「埼玉の秩父あたりにあるわ。ここから二時間以上かかるわね、フアイト〜！」

「ふ、ふざけんな〜！」

こうして、新たな新天地での暮らしに胸を踊らせる？俺であった…。

第一話：「龍の目覚め・1」（後書き）

飛龍天翔をお読みいただき、誠にありがとうございます。いかがだったでしょうか。感想や指摘などありましたら、どうぞよろしくお願ひします。

第二話：「龍の目覚め・2」

正直、ここまで遠いとは思わなかった。

姉貴の言った通り、ここまで2時間以上かかった。

やってられん、俺は一応不良だ、2時間以上電車で揺られて馬鹿正直に学校なんざ行けるか！

やはり姉貴の住んでるところじゃダメだ。

俺は転入の手続きや試験、挨拶をするために姉貴と学校へ行った。

一人でいいと言ったが、ぴったりとついてきやがった…。正直ハズい…。

その帰りの途中、とりあえず高校の近くに自分の住む場所を探すことにした。

「ったく、意地張らないであたしのところで通えばいいのに。」

「冗談じゃねえ、毎日毎日2時間もかかって、学校なんかいけるか？」

俺は学校の通学路である坂を降りながら、いいところはないかと街の辺りを見回した。

坂を降りきると、街中の商店街の真ん中で不良達が睨み合っていた。

不良の一人の

「アフロ」が怒鳴っている。

「ああっ！？その子は俺が声かけたんだよ、てめえは引っ込んでろや！」

相手の

「歯抜け」が言い返す。

「ざけんな！俺が先だ、俺が！」

二人の取り巻き達もお互いに罵り合う。
どうやら、

「アフロ」と

「歯抜け」が不良達を中心らしい。

奴等にかからまれている少女がなにか（猫か？）を抱いて震えている。まあ、女の子だから仕方ないな。周りの人々は助けに入ろうか入るまいか悩んでいる人もいれば、そのまま通り過ぎる奴もいる。

ま、そんなもんだな。人つてのは。

そして、見兼ねた姉貴が俺の肩を叩いた。

「助けてあげなよ。」

言われずとも行くさ。ただし、助けるためじゃなく、喧嘩するためだ。

「おい、その爆発頭と歯抜け、ちょっとこっちむけや。」

馬鹿にされ、不良達がこちらを向いた。

「んだと！？てめえ、知らねえ顔だな、誰だ！？」

「ぶっ殺されてえのか、失せるコラ！」

俺は指を鳴らしてバカどもを挑発する。

「ごたくはいいから、かかってこいよ。」

あとついでに棒読みに

「その女の子からも離れろ、てめえらの臭い息がかかって苦しいとよ。」

…正直こういう人助けのセリフは苦手だ。

しかし、奴等はその言葉でキレたようだ。

「てめえ、調子に乗ってんじゃねえぞ！コラア！」

「アフロ」が拳を固めて殴りかかってきた。それをかわして、顎にアップーを見舞ってやる。

「アフロ」が倒れると

「歯抜け」も襲いかかってきた。

こいつら、口だけででんでたいしたことない奴等だ。…がっかりだな。

「歯抜け」に右をお見舞いするとさらに歯が折れて、

「歯なし」になった。

顔が赤く染まって、

「歯なし」が喚き散らす。

リーダー格がやられると取り巻きはあつさり退散して行った。

奴等が逃げた後、姉貴が少女に駆け寄った。

「さすがね、あつさりやつつけちゃった。」「あんなやつら…つまんねえよ。」

俺が吐き捨てるように不満をあらわにすると、姉貴は苦笑した。

「大丈夫？怪我はない？」

「あ、ありがとうございます。」

震えていた少女が立ち上がって礼を言った。

よく見ると彼女は相当な美少女だった。

髪はショートヘアで、整った顔立ち、着物がよく似合いそうな…。

「すいませんでした。私、ボーツとしてて、そうしたらあの人達にぶつかっちゃって…。」

「よくああいうのがいるの？」

「はい、前はそんなにいなかったんですけど、あの…、この近くに…不良っていうんですか、そういう人達の中で有名な人が来たみたいで、ここ一か月ですごい多くなったみたいで…。」

「へえ…、そうなんだ？ねえ、じゃあもしかしてあんたにはちょうどよかったんじゃない？」

「だと…いいけどな。」

もしその有名な奴ってがさっきのみたいだったら、北海道の方がマシだぜ。

頼むからそれだけは勘弁願いたいね。少女が俺の方を見た。（正確には制服の方をだが）

「あの…、もしかして新しく転入してくる人ですか…？」
頭を掻いて答える。

「ああ…。」

姉貴が俺の髪をクシャクシャにして言う。

「それがね、こいつったら、東京にある私の家じゃ遠くていやだっというのよ。あのさ、いきなりで悪いんだけど、この近くにこのバカが住めるとこないかな？アパートとか。ボロボロ潰れかけでい

いからさ。」

人事だからってむちゃくちゃ言いやがるな。
少女が考える。

「ボロボロ、潰れかけですかあ…。」

いや、それは条件の内に入れんなよ。

やがて少女が思い付いたらしく、

「あの、もしよかったら…。」

「えっ、あるの？」

「はい、こちらです。」

俺達は少女の後についていく。

姉貴がニヤツとして俺を見る。

「ねっ、人助けっていいもんでしょ？」

なんか…前にも増してしたたかになったな。

少女の抱いている猫が、俺の思いを肯定するかのように鳴いた。

第三話：「龍の目覚め・3」

「自己紹介が遅れましたが、私、橋本八雲はしもとやくもつていいいます。どうぞよろしく願います。」

「私は龍岡洋子、こっちは奨。こちらこそよろしくね、八雲ちゃん。ほら、あんたも挨拶！」

「どうも…よろしく。」

「何よその無愛想な返事。格好つけてんの？プツ。」
姉貴が笑ったが、無視した。

俺は元々こういうタイプの女の子は好かない。

前にも話したが、俺はたまに相手の心が

「感じれる」ときがある。その時、いい人に見えてた奴が、実は最悪だった何てさらにある話だ。

だから信用出来ないなんてひねくれてると人は思うだろう。

しかし、幼い時から人の醜い部分しか見れなければ、こんなひねくれたガキも出来る。

歩いて数分すると古ぼけたアパートが見えた。

「あそこです、あのアパートは私の父が経営しているんですが、そのお、少し問題が…。」

問題？

「あ、でも学校に近いし、家賃すごい安いですよ！」

八雲がとても可愛い顔で微笑む。おそらくこの顔を見たら、ほとんどの男が部屋を借りるのだろう。

しかし、この笑顔があっても±0になる、いやむしろ-になるほどのヤバさがそこにはあった…。

とりあえず、彼女はおいといて自分が住むかもしれないアパートを一目見ることにした。

「着きました、ここです！」

「…ぼ、ぼろっ！」

思わず声が出てしまうほど…ぼろかった。正直、なんかもうその一言にしか言えないな。

2階への階段が今にも崩れ落ちそう…。しかもあっちこっち穴が空いてて、なんか風が吹き込んできそうな感じた。

第一印象から決め付けたくはないが、住みたくない。

そんなことを思っていると、2階から扉が開く音がした。

「あ、お父さん！」

ドアを開けて出て来た男はなんか、だらしない男を代表したような出で立ちだった。

頭にはちまきを身に着け、Ｔシャツ一枚、ジーパンをはいていて、体つきは…腹が出ている。

姉貴も俺も八雲が父と呼ぶ人物を見て、本当に父娘か？疑ってしまっただった。

「もう、なんでだらしない格好してるの？久し振りにうちに入居してくれる人が見つかったのに。」

「本当かい？いやあ、こんにちは。この子の父の橋本拓馬はしもとたくまです。入居者は大歓迎です。」

え、すでに俺は入居者になっているらしい、冗談じゃない。

「いや、俺はまだここに住むと決めたわけじゃ…。」

「えっ！？ここに決めてくれたんじゃないんですか！？」

「え、いや、さすがにこんなボロじゃ…なあ？」姉貴に同意を求め。しかし…。

「あたしは関係ないし…。」

こんな時だけ他人のようにするなよ。

「だってあんた、あたしんぢや不満なんですよ？だったらここでもいいじゃない。」

…まだ文句言ったこと根に持ってやがる。

「やめちゃうんですか？そんな…、それじゃここ、潰れちゃいますよ…。」

卑怯にも八雲が女の子の必殺技

「涙」を使いやがった。八雲の瞳が涙で潤む。

「うつ…。」

「ここにすれば？ほら、学校近いし。」

姉貴が横槍を入れる。くそつ、トコトン根に持ってやがる。

「お願いします！」

八雲が頭を下げる。くそつ、こういうことされると断れないのが俺の悪いとこだ。

「ああ、わかったからもう頭上げてくれ。ここに住ませてもらう。」

八雲が潤んだ瞳を俺に向けた。

「本当ですか！？ありがとうございます！」

姉貴がニヤニヤしながら俺を見た。

「あゝあ、本当は女の子に甘いんだから。このこの。」

けしかけた本人が何を言うやら。全く…。

そして、八雲の

「父」と呼ばれる人物も礼を述べてきた。

「本当にありがとうございます。マジで冗談抜きに潰れかけですからね。」

そんなにヤバいのか、ここ。だが、この人を見てるとそんな風に見えるな。

「よろしくお願いしますね。それじゃ、私原稿がありますので。」

と言って彼は階段を登っていった。

「あの、じゃあどの部屋にします？」

「あ、そうだな。さて、どうするか…。2階つても悪くないな…。」

「

そんなことを考えていると、

バキッ！ズドン！！

「な、なんだ？」

なんと階段途中の段差のところが外れてそのまま、橋本さんが地面に激突したのだ。

「あはは…、こりゃ完全にガタがきてるねえ…。」

「お父さん、大丈夫!？」

と八雲が駆け寄った。

突然のことに呆然となったが、そのうち姉貴が笑い出した。

「アハハハ、奨! あんたにぴったりのアパートじゃない。頑張れ! アハハハ!」

俺はふと、まだ北海道にいた方がマシだったなと深く後悔したのだ。
った…。

第四話：「龍の目覚め・4」

とりあえず、なんだかんだで俺は今日からこの青林高校で学ぶこととなった。

ここまでくるのにどれほど苦労したことか…。

こないだ俺は偶然助けた少女、橋本八雲のお礼？により、彼女父拓馬の経営するアパート

「希望館」(正直、名前に見た目が追い付いてないと思う)に下宿することになった。

俺は決まるや否やすぐに姉貴ん家に置いてあつた荷物を取りに行った。

姉貴はその際、終始ブスツとしていた。

「何怒ってんの？姉貴。」

「いくらなんでも早すぎでしょ、せつかく久しぶりに会えたのに。あんたには肉親の情つてのがないの!？」

んなおおげさな…。

「でも、姉貴にはいつも迷惑かけっぱなしだな。悪い、たまに顔出しに来るよ。」

「もう…。でも本当にあそこでいいのね？」

「ああ、とりあえず学校近いから楽だし、美少女はいるし、それに家賃安いからな。上京したばかりのガキにはちょうどいいボロさだぜ。」

姉貴は呆れたように首を振った。姉貴はまだ頬を膨らましていたが、俺が一度決めたら絶対やるという性格を理解していたし、何とか納得してくれたようだった。

「それじゃ、体に気をつけてね。あんま無理しちゃだめよ?」

「わかってるよ、俺だつてそんなにバカじゃない。程々にするさ。」
「うん…、ならいいわ。」

こうして俺は姉貴のもとから離れて、
「希望館」で新たな生活を送ることになった…のだが。

「うゝん、あのね、龍岡君。悪いんだけど君は一階に住んで貰いたいんだ。」

管理人の拓馬さんが申し訳なさそうに言った。まあ、当然だな。何しろこないだ2階の階段はぶっ壊れて、通れなくなっちまったんだから。

幸いなのはこのアパートに住んでんのがこの父娘と俺だけで、迷惑がかからないと言う点だ。

…にしても。ボロ過ぎたる。部屋に入った時、さすがにあきれかえった。直しとけと言いたい穴が2、3ある。風が吹き込んで、寒い。直せないほど貧乏なのか、正直再び激しく後悔した。

しかし、いつまでも悔やんではばかりでは仕方ない。俺はとりあえず、最低限穴は防ぎたいので工具屋に向かい、道具と木材を手に入れることにした。

木材屋に向かうと、途中のコンビニでこの前の不良、
「アフロ」と

「歯抜け」、そしてその取り巻きがいた。

やつらも俺に気付いたらしい、近付いてきた。

「てめえ、こないだはよくもやってくれたな。」

「今度はぜつてえぶつ殺してやる！」

「たたく、懲りない奴等だ。だが、こういうのは嫌いじゃない。奴等が殴りかかってくる…。」

…2、3分後、俺は奴等を片付けて木材屋に入った。なかなかちよつどいい形の板がない。…仕方ない、大きいの買つて切るか。

などと考えていると、店員らしい少女（年は14、5か？）が近付いてきた。

「何探してるの？」

「いや…、大したもんじゃないんだが…。」まさかボロアパートの修理にいる板を探しているとは言えない。

「い、犬小屋を作りたいんだが、ちょうどいい板が見つからなくてな…。」

とりあえずごまかしておく。

「ふうん、さっきのケンカっぷりを見るとそんなことする人には見えなないけど?」

見てたのかよ…。

「ねっ、お兄ちゃんさあ、結構ケンカ強いんだね。初めて見るけど、引っ越して来たの?」

喧嘩強い?とても女の子が言う言葉じゃないだろ。まるで姉貴のようだ。

「とにかく俺は

「犬小屋」に必要な板が欲しいんだ、置いてないか?」

少女は疑いの目を向けたが、とりあえず手頃なサイズの板がある場所へ案内してくれた。

俺は必要な板を探し始めた。

「あのね、最近さ、この街だと喧嘩は日常茶飯事になっちゃったんだけど、不良をのしちゃうなんてもうこの街じゃ珍しいの。それにいくら弱くても不良グループ5、6人をあっさりやつつけるなんて驚いたよ。」

俺は最初から最後まで無視を決め込むつもりだったが、さっきの言葉に眉をひそめた。

「弱い…?どうして?」

俺が反応したことが嬉しかったのか、笑いながら答えた。

「うん、あたしもいつも女の子を助ける度にやつつけてるんだ。あいつら、弱いくせに可愛い女の子にからんでんの。ムカついたからぶっ飛ばしてやったわ!」

「へえ…。」

人は見掛けによらないと言うか、この細い足でよくもまあ…。それ

に普通女がぶつ飛ばすなんていうか？

北海道ではいなかったな。にしても、どこまで弱いんだ、あいつら……。いや、彼女が強いのか？

少女に感心し、不良に呆れながら板の山を漁っていくつかいい板を見つけた。これなら穴も防げるな。

「そりゃ大したもんだ、不良どもを叩きのめして女の子を助ける。まるで正義のヒーローだな。」

少女はムツとした。

「助けようとする人があたし一人しかいないからよ。誰かが困つても見て見ぬふり。一か月前はまだ何人かいたんだけど、不良グループのリーダーみたいなのが来てから、すっかりそんな人がいなくなっちゃった。」

また聞いたな、その

「一か月前」って単語。

「何なんだよ？そのリーダーってのは。」

俺は選んだ板の代金を払いながら聞いた。

「知らない。でもなんか関東中を取り仕切ってるやつみたい。」

「ほう……。」

どうやら東京にきた甲斐はありそうだ。そんなことが頭をよぎる。

そして、少女は代金のおつりを俺に渡して微笑んだ。

「毎度ありがとうございました。また来てね。」

「ああ、

「犬小屋」が壊れたらまたな。」

「あたし浅野海^{あさのうみ}。お兄ちゃんは？」

「俺は龍岡奨だ。」

「じゃあ、奨お兄ちゃん、またね！」

「あー、またな。」

こうして俺は海のいる木材屋を後にし、ボロアパートで穴を塞ぐことに奮闘することになった。

しかし、俺はまだ気付いていなかった。この不良のリーダーとやら

が俺に深くかわってくることに…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5415d/>

飛龍天翔

2010年10月8日23時43分発行